

研究者の多様化の時代における学協会のあり方 ——JAMS 研究大会 1 日目パネル報告——

山本博之

日本マレーシア研究会(JAMS)の2009年度研究大会の1日目は、「研究者の多様化の時代における学協会のあり方:JAMSの学会化に何を期待するか」と題するパネル報告が行われた。

1992年の設立から18年目を迎えたJAMSは、この間に大きく発展してきた。この流れは、会報『JAMS News』の誌面の一新と関東地区の読書会・地区例会の定例化(2001年度)にはじまり、研究大会と会員総会の制度化(2001年度)、会員メーリングリストの開設(2002年度)、規約の制定(2003年度)、規約に基づく運営体制の開始(2004年度)、クアラルンプール地区研究会の設置(2005年度)、ウェブサイトの開設(2005年度)、社会連携ウィングによる公開セミナーの実施(2008年度)、ディスカッションペーパーの刊行(2008年度)などにより、JAMSは学術団体としての形を整えてきた。現在、会員数は約200名となり、その活動は他の学協会と比べて決して見劣りしないものになっている。

昨年度(2008年度)には西尾寛治委員長によって学会化検討ワーキンググループが置かれ、金子芳樹座長のもと、JAMSの学会化の可能性が検討された。2008年度の会員総会ではワーキンググループの中間答申をもとに学会化が議論され、学会化を進める方向でさらに検討することが承認された。これを受けて今年度(2009年度)の会員総会ではJAMSの学会化が提案され、承認されたが、その会員総会に先立って行われた本パネルは、JAMSの学会化にどのような意味があり、そしてどのような可能性と課題があるかを検討する機会となった。

JAMSの学会化とは、すでに学会並みの活動を行っているJAMSの名称を実態に合わせ、そのことを通じて自分たちの活動を社会に適切に位置付けたいという思いの表れであり、JAMSの活動の展開から見て自然な流れである。他方で、すでに数多く学会が存在する状況で新しく学会を作ることの意義も問われることになる。

この問題はJAMSが学会化するか否かという選択の話にとどまらない。学会化したら話は終わりではなく、どのような学会にするかという問いが直ちに生じるためである。ここで求められているのは、JAMSの活動を1つ1つ点検して、JAMSの現状に即しつつ、しかもJAMSを取り巻く社会の状況にも配慮しながら、JAMSの活動を組み立て直すことにほかならない。

JAMSの活動を点検する上では、研究対象地域はマレーシアに限定するのか、さまざまな学問分野をどのように扱うのか、研究と社会の繋がりをどう考えるのか、関連する他学会との関係をどうするかなどの問いが直ちに思い浮かぶ。また、学会化を目指すのであれば、学会誌(および査読制度)をどうするかも問題になるだろう。研究大会と会員総会を東京圏と関西圏だけで行っていることや、設立時から一般会員・学生会員の区別なく年額2000円である会費についても見直しが必要になるかもしれない。

これらの問いの背景には、JAMSは東南アジアやアジアを対象とする既存の地域研究学会の下部組織のような存在になる方向に向かうのか、それとも組織が比較的若く小回りがきくことなどの利点を生かして通常の学会にできないようなユニ

ークな活動を積極的に行うのかという問いがある。研究や研究者が多様化している今日、JAMSの会員にもさまざまな背景や関心を持った人が集まっている。どのような活動を行うことが会員にとっても社会にとっても意義があるものになるのか、会員の間で考え方を確認する時期が来ているように思われる。

このパネルでは、以上の考えを踏まえてJAMSの今後の展開の可能性について検討した。パネリストは、大学や民間企業や学会などで運営に携わった経験を持つJAMS会員にお願いした。各報告者と報告タイトルは以下の通りである。

1. 金子芳樹(獨協大学)「JAMS 学会化の経緯、課題、展望:法人化の流れの中で」
2. 西尾寛治(防衛大学校)「JAMS と地域: 研究対象はマレーシアか、近隣地域も含むのか」
3. 岡本義輝(宇都宮大学博士課程)「民間企業での経験を踏まえ、JAMS に期待するもの: マレーシアの日系企業に役に立つ研究も」
4. 吉村真子(法政大学)「マレーシア研究と学会の連携: 国際的・国内的な連携の可能性の視点から」
5. 宮崎恒二(東京外国語大学)「研究者コミュニティを超えて」

以下では、個別の報告内容を紹介するのではなく、各報告および総合討論で出された論点のうち最も主要なものについて筆者なりの考えをまとめて紹介したい。すなわち、JAMSは「普通」の学会を目指すのか、それともJAMSの特性を活かして他の学会にできないような活動を積極的に行っていくのかという問いである。このことは、JAMSは研究の質的向上を最優先課題とする

のか、それとも幅の広がり重視なのかという問いともねじれながら重なる部分がある。

JAMSはこれまで機動性の高いユニークな活動を積極的に行ってきた。それはなぜか。マレーシアは(残念ながら)日本社会において認知度が低く、そのため放っておけばマレーシア研究は粗略に扱われるという現実があり、そのことをマレーシア研究者はよく理解している。ただし、マレーシア研究者は自分たちが粗略に扱われていると不平を言ったりしない。言っても状況は改善されないからだ。現状に満足できない人びとは、自分たちで工夫して活動できる「場」を作ることに力を注ぐことになる。

JAMSが機動力の高いユニークな活動を積極的に行ってきたのは、放っておいたら誰からも関心を向けられないという思いを抱きながら、それを解消しようと積極的に努力してきたために他ならない。このことは、国際社会におけるマレーシアの動きにも重ねて見ることができる。JAMSがマレーシアの特性を受け継いでこれまで発展してきたことを考えるならば、今後もマレーシアのそのような特性を維持してマレーシア研究らしい活動を行っていくのが妥当だろう。

JAMSはどこに重点を置くのか。研究や研究者は多様化しているが、その多様性は基本的に教師が学生を教え導く大学等の教育・研究機関になじまない部分も多くあり、大学・大学院で対応しきれない研究の広がりを受け止めることができるのは学会である。そのことを積極的に進めていくことで学会の意義を示すことも期待される。

*

1992年、JAMS結成の話を聞きつけ、当時北区西が原にあった東京外国語大学の研究会に顔を出したのは私がまだ大学院の修士課程に

在籍していたときだった。その後何度か JAMS の研究会に出席したが、研究大会は遠隔地での開催が続き、参加の機会がなかなか得られなかった。その後も、私のような一般の学生には、ときどき送られてくるニューズレターを読むぐらいで JAMS の活動内容はよくわからないままだった。

1998 年から 2000 年までマレーシアのサバ大学で勤務したときに同僚だった西尾寛治さんも、JAMS に大いに期待しながらも、その活動が十分に見えないために参加しづらいという感想を持っていた。コタキナバルのセドコ屋台村でビールを何本も空けながら、いずれ日本に戻ったら JAMS を研究の場として建て直し、マレーシア研究を盛り立てていこうと約束した。

2001 年に帰国して JAMS 事務局を引き継いだ。会員名簿の記載内容を 1 人 1 人確認し、会費納入をお願いするとともに、JAMS が会員に何を提供できるかを考え、まずは会報の充実をはかった。西尾さんは約束通り関東地区の読書会と地区例会を立ち上げた。これにより東京に JAMS の活動拠点ができ、大学院生や若手の研究者が集まってきた。そのなかから西芳実さんや篠崎香織さんのように事務局を手伝ってくれる人たちが現れ、その後さらに数が増えていった。

この人たちは、職場や所属組織の命令に従っているためでも、カネや名誉のためでもなく、マレーシアが世界で果たしている役割を理解して、それを研究するとともに自分たちが体現することでその意義を世の中に伝え、それによって世の中がよりよくなると信じて、そのための場を作ろうという思いを共有する人たちである。JAMS がこのような考え方を共有する人たちによって支えられているのは、JAMS がほかならぬマレーシアを研

究対象とする団体であるためであり、ここにマレーシアの研究団体である JAMS らしさがある。

私たちは、JAMS の運営にマレーシア社会のあり方を反映させようとした。定められた手続きに従って公の場で議論して決定し、いったん決定されたことはきちんと守るという臨み方である。これにより、個別には自分の意見が反映されないという不満を抱く人が出てくるかもしれないが、手続きに従って決めた以上は、そのような不満を抱く人が何人か出ることもやむを得ないと考える。ただし、JAMS の運営に対する具体的な改善案が出された場合には、それを積極的に取り込んで実現させていく。実際、JAMS の活動に対する建設的な批判や要望・提案を受けるたびに、JAMS はそれらを取り入れて実現してきた。

このことを忘れず、柔軟に活動を展開してきた JAMS の良さを今後もますます伸ばしていきたい。そうすることを通じて、マレーシア社会のあり方を世に示すことにもなるはずである。今後、会員のみなさんには JAMS の運営に対して大小さまざまな不満を抱く人もいるかもしれないが、不満は改善の原動力となるため、個人的な思いを場作りのエネルギーに転化して、JAMS を改革する方策を提案していただき、さらに JAMS 運営委員として改革の実現にぜひ取り組んでいただきたいと思う。JAMS はこれまでもずっとそのように運営されてきており、それゆえに柔軟かつ積極的な活動を続けてきた。学会化するかどうかにかかわらず、この点は JAMS が誇るべきことであり、今後も継承されるべきことだと思う。このことを抜きに「普通」の学会を運営するのはとても容易ではないように思う。